

モチベーションの混合状態：外国語学習における 学習者の抵抗と前向きな意欲に関する考察

Mixed states motivation: An inquiry into learner resistance
and engagement in foreign language learning

宮房寿美子、Robinson Fritz、
Joseph Shaules、Maria Gabriela Schmidt

要 旨

This paper reports on an on-going research project to explore learner resistance to foreign language learning. Negative attitudes toward foreign language learning are a major issue for Japanese university students. Previous studies have often treated this attitude simply as a form of “loss of motivation”. Based on intercultural adaptation theory, the authors assume that learner motivation is not simply “motivated” or “unmotivated,” but psychologically complex. The authors have developed the Linguaculture Motivation Profiler (LMP), a psychometric instrument that measures foreign language learners’ motivation in terms of psychological resistance, engagement, and mixed states of motivation. This project contributes towards a more complex understanding of learner motivation, and has widespread implications for pedagogy and increasing learners’ self-efficacy.

はじめに

モチベーションは、外国語学習の成功や失敗の主要な理由と見なされることが多い (Hadfield & Dörnyei, 2013)。外国語学習に関する文献では、一般的に日本人の外国語（英語）学習者のモチベーションの欠如が広く指摘されている。例えば、多くの日本人学習者にとって英語は日常生活と無関係であると感じ (Lafaye & Tsuda, 2002; Morita, 2013)、教員は多くの日本人学習者がやる気を失っていると訴え、学習者の態度が悪いことが大きなやる気を失う要因であると述べている (Sugino, 2010)。最も一般的に、否定的な態度は「やる気の喪失」と言う言葉で語られ、学習者のやる気を失わせる要因に焦点を当てた研究が行われている (Agawa et al., 2011; Kikuchi, 2013, 2015)。その他の意欲低下の要因としては、学習者が外国語を学習する際に経験する不安があり、否定的な態度については精神疾患として扱う (Trang, Baldauf, & Moni, 2013) ため、一般的に学習の失敗の兆候として扱われる。しかし、このような理解は学習者個人のモチベーションに影響を与える。例えば、「英語は好きだ

が、勉強はしない」と思っている学習者もいる。単に「やる気の喪失」では、このような複雑な内的要因、状況的要因、および時間的要因を説明することができない。

本研究では、モチベーションを「抵抗」と「前向きな意欲」の2つの軸に沿って概念化している。学習者は前向きな意欲と抵抗を同時に経験するため、モチベーションは常に動的であると言える。このような混合状態は、「学びたい（前向きな意欲）」と言いながら、「練習や勉強をしたくない（抵抗）」と言う学習者に見られる。このような混合状態や葛藤を測定し、また理解することが本研究の重要な目標である。次に本研究は外国語学習を異文化間適応理論に基づいていると考える。つまり、社会的な価値を自分の価値として受け入れないことを示す (Shaules, 2019)。しかし、こうした変化の要求に適応することで、自然な回避反応（抵抗）が生じる (Shaules, Fritz & Miyafusa, 2020)。したがって、外国語学習に対する抵抗は学習の失敗とはせず、学習プロセスの正常な過程であると考えられる。

本研究は、学習者のやる気を失わせる共通のパターンを特定し、さらに分析を続け、言語学習における抵抗を減らし、やる気を起こさせる方法を調査する。調査が進むにつれて、学生が外国語学習に対して複雑な感情を抱く理由を理解することができるだろう。さらに、学習者が外国語学習に対する抵抗感を理解することで自分自身の言語学習をよりよく管理し、自己肯定感を高める可能性がある。教育学的な意味合いとしては、学習者が言葉話をしたり読んだり、聞いたりして理解する反射的な能力を促進し、学習者の学ぶ意識の向上を目指す。さらに教育者と学習者の活発な対話を促し、学習者のニーズを反映したカリキュラムの設計などが挙げられる。

抵抗と前向きな意欲

本研究では抵抗と前向きな意欲をより理解するために異文化間適応の視点を取り入れる。この分野の研究は、移民や留学など外国での滞在に伴う心理的な課題に関するものである (Bennett, 1998; Berry, 1997)。Shaules (2017) は、外国語の学習は、基本的に外国の文化環境に適応することと似ている、と提唱する。彼は言語学習と文化学習の両方が、外国人のパターンを認知的心や自己の認知構造における外国パターンに具現化できる、と理解している。また言語学習は、心や自己の認知構造に深く根ざした認知システムの再構築を伴う。したがって、ポジティブとネガティブの両方の反応を自然に引き起こすものである、と彼は主張する。否定的な反応と意欲的な反応（「抵抗」と「前向きな意欲」と呼ぶ）を引き起こす。本来、抵抗とは、異文化滞在者の文化的な差異に対する否定的な判断のことを指していた (Shaules, 2007) が、この概念は言語学習の心理的な要求に対する反応を意味するためにも拡大された。これに伴い、Shaules (2019) の Developmental Model of Linguaculture learning (DMLL) では、言語と文化の学習は、外国の言語的・文化的パターンの要求に対する心理的適応が含まれると説明している。

Shaules (2019) が説明する言語文化学習の動機づけは、図1に表されている。動機づけは、創発的なものであると見なされており、動的な学習の心理的な要求に対応するプロセスである。抵抗と前向きな意欲は、同時に両方とも出現することがある。外国語学習は学習者に今までにない授業スタイルや教員やテキストなどに適応することが求められ、学習者はそれを多かれ少なかれ受け入れて反応し、

その結果、抵抗や前向きな意欲が生じる。Larsen-Freeman (2011) は、複雑系の観点から、「言語学習は、不変のシステムに知識を追加することだけではない。それはシステムを変えることである」(p.57)と主張している。

抵抗と前向きな意欲の認識の枠組みは、以下の通りの重要な意味を持つ。抵抗は望ましいものではないが、学習の自然な一部である。Shaules (2017) は、抵抗とは批判的な判断に特徴付けられ、学習者は学習することが難しいと自分自身に責任を負わせる傾向があると述べている。例えば「自分は語学が苦手だ」と言ったり、個人的な失敗の感覚を必要以上に気にしたりする。実際、抵抗は積極的な状態であり、学習への取り組みと共存することができる。要するに、学習者は学習への取り組みと同時に抵抗する。このような混合状態は、学習者が「学びたい（前向きな意欲）」と言いながら、「練習や勉強をしたくない（抵抗）」と言うような場合に見られる。

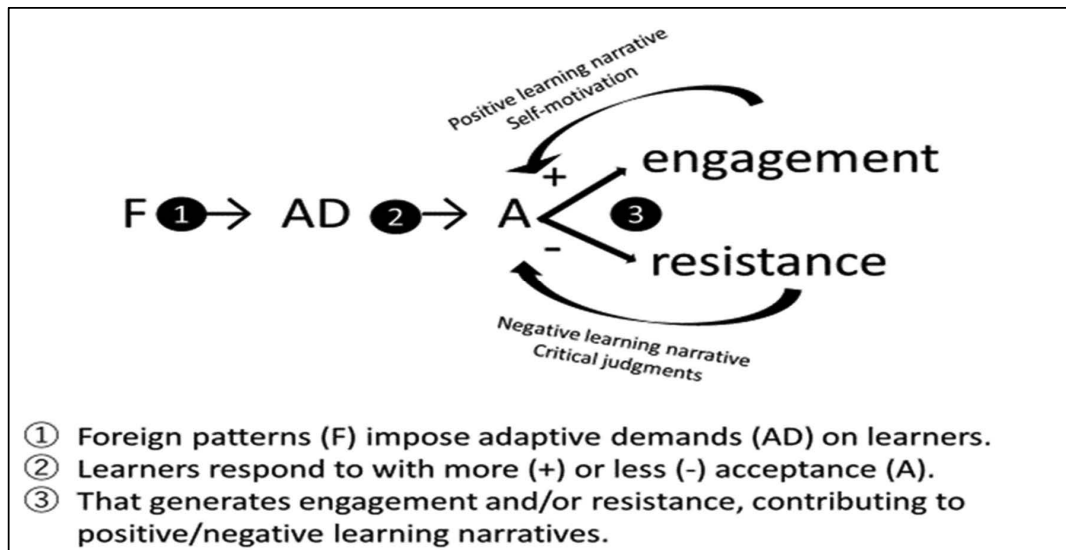


図 1. モチベーションと言語文化学習

Shaules, Fritz, & Miyafusa (2020)

抵抗と前向きな意欲が学習者の中でどのように現れるかを理解する方法として、Shaules (2017) は、教員免許更新講習で52人の中学・高校で教える英語教員を対象に「自分のことを話す時に、英語に対する自分の気持ち（ポジティブまたはネガティブ）について話す時、学生はどのようなコメントをしますか？」という質問に答えてもらった。収集されたコメントは、以下の観点で分類された。ポジティブな発言には「海外旅行で英語を使いたい」、「英語が好き」などの肯定的なコメントがある。ネガティブなコメントがある場合は、「英語が嫌いだから」、「外国人と一緒に働きたくない」など否定的な価値判断が含まれている。「本当に英語は嫌いだから」、「海外には行かないし、海外には住まない」、「父は農家だから、もう英語を勉強する必要はない」と言った具合に英語から遠ざかっている。もう一つの回答の分類は、混合状態であった。学習者がポジティブに取り組んでいると同時に、ネガティブを感じる様子が窺える。「英語は好きだが、勉強は好きではない」などのコメントがあった。この研

究の詳細な説明は、Shaules (2017) に掲載されている。

本研究の目的は、学習者のやる気を失わせる共通のパターンを特定・分析し、学習者の抵抗を減らし、やる気を起こさせる方法を考察することである。抵抗感を持つ学習者は、学習者の自己否定、心理的距離感、外国体験への開放性のレベルの低さなどを示すと予想している。

Linguaculture Motivation Profiler (LMP) の開発

上記の中学・高校の英語教員対象の調査から得られたコメントの多くは、学習者の心理測定を作成するための原点となった。LMP の最初の 54 項目は、探索的研究で発見されたデータと類似した内容を使用して英語で記述されたアンケートである。内容は「前向きな意欲」、「抵抗」、「混合状態」と一致するものであった (Shaules, 2017)。この英語版の項目を基にして、後に日本語版の LMP を作成した。両言語の最終版は資料 1 に示している。

1. 調査対象学生

本研究の参加者は、主に本科研究プロジェクトの研究者が所属する東洋学園大学、長崎大学、日本大学の 1 年と 2 年生で計 596 名である。学部は、グローバルコミュニケーション学部、経済学部、商学部等が含まれる。英語またはドイツ語を必修科目としている外国語専攻の学生、およびその他の専攻の学生を対象とした。各大学の外国語科目の授業中にアンケートを実施した。時期は 2021 年度の 4 月の前期（春学期）が開始した 2～3 週目にかけて行った。項目別によるアンケートはすべて日本語版 LMP で行われ、参加者全員がリサーチの同意書を理解した。

2. 調査方法

英語学習の経験が学生の学習意欲にどの程度関わりがあるかを調査するためにアンケートを実施した。前半の項目は、性別、年齢、国籍、母国語などを質問し、英語力や過去に英語を勉強した期間や場所、また英語以外の外国語能力について記入してもらった。後半からは前向きな意欲、抵抗、混合状態に関連する質問である。2021 年 4 月初旬～中旬にかけて、異文化関連や外国語等の授業で 10 分程度を使って Google フォームのアンケート機能を利用して質問に答えてもらった。学生たちは回答されたデータが研究のために使用されることを理解し、協力依頼に同意した。質問項目の回答について先行研究を照合し、その後 SPSS を利用した因子分析を行い、カテゴリーごとに分類し記述した。

3. 結果と分析

1) アンケート結果

本研究では、前向きな意欲、抵抗、混合状態に関する質問は「全くそう思わない」「そう思わない」「そう思う」「非常にそう思う」の 4 つの選択肢とした。質問の順番は無作為に並べていたため回答者には分類された質問項目を記載していることが伝えていない。以下に 3 種類それぞれの回答結果と内容を記載する。

a. 前向きな意欲

多くの質問項目が抽象的な内容になっており、また回答結果からは英語を学ぶことを楽しんでいることがわかる。その一方で、英語を学習する重要性を過度に受け入れているようにも窺える。国際化についての考えや、英語話者となることについて前向きな考えを持っていることがわかる。

「質問：英語を学ぶとワクワクする。」に対し、71%がそう思う、または非常にそう思うと回答している。そして、「質問：英語を学び国際人になりたい。」でも88%がそう思う、非常にそう思うと前向きに考えていることが理解できる。「質問：英語を使って自分の考えを表現することは楽しい。」では80%以上の学生がそう思う、非常にそう思うと回答していた。「質問：英語を実際場で使っている人を知っているので英語習得に興味がある。」には、86%がそう思う、非常にそう思う、と回答した。続いて「質問：将来英語を使うことはないので、勉強する気にならない」では、100%がそう思わない、全くそう思わないと答えているため、どの学部においても英語は将来使用のために学びを続けたいと意欲を示している。

b. 抵抗

抵抗することは語学を学ぶ過程では普通であることがこの結果からも窺える。回答結果の一部からは、学ぶモチベーションが減退していることを認めている。また、学生は現状では英語の勉強をまだ満足にできていないのもっと学ぶべきであり、努力した成果が結果に結びついていないと感じている。要するに、英語を学ぶ努力はしたが、失敗に終わってしまったと思っている学生もいる。回答からは、文法を何年学んでも習得できない理由は小学校、中学校、高等学校、塾、英会話教室などを含む教育機関やその関係する先生ではなく、自分自身であると理解していることがわかる。

例えば、「質問：英語を長く勉強してきたが、ほとんど上達していない。」では約70%がそう思う、非常にそう思うと回答した。理想と現実のギャップがあると認識している。「質問：もっと努力しないといけないと分かっているがしていない。」は約80%そう思う、非常にそう思うと自分自身に責任があると分析している。以上の通り、回答者によって学習意欲にも差があることがわかる。

c. 混合状態

学生たちは、英語の学びにおいて思うように上達しなかった理由として、自分自身の失敗であると言う思いと葛藤している。「必要であれば学ぶ」と言う思いと「英語を学ぶモチベーションはもうない」思いがあり、これらの意見が混在している。

「質問：英語をもっと勉強すべきだと思うが、実際にはしていない。」では、70%以上がそう思う、非常にそう思っている。中学、高等学校で約6年間、小学校からは英語の授業が始まった学生はそれ以上学習を続けているにも関わらず、ほとんどの学生が満足していない。また、「質問：もっと努力しないといけないと分かっているがしていない。」は60%がそう思う、非常にそう思うと回答している。また、「質問：もっと英語を使いたいけど、自信がない。」は85%がそう思う、非常にそう思うと回答している。

2) 因子分析

検証は、因子分析により行った。表1の通り、プロマックス回転による主因子分析を行い、3因子が抽出された。これら3つの因子は、LMPが予測する構成要素である抵抗、混合状態、前向きな意欲に対応するものであった。抵抗には、「一生懸命勉強したが、英語力があがらなかった」、「英語をもっと積極的に使いたいけど自信が持てない」、「英語は好きだが、勉強はしない」等のやる気をなくさせる項目が含まれている。混合状態には、前向きな意欲と抵抗が混在する項目がある。最後の因子である前向きな意欲は、「英語の勉強は楽しい」、「英語を学ぶとワクワクする」などが含まれる。

表1 因子分析結果

小数点第4位を四捨五入

質問項目	因子		
	1	2	3
質問 19. 英語は一生懸命勉強してもできないので、努力しない。	0.724	0.124	-0.084
質問 34. 日本人が英語の習得を強制されるのは不公平だ。	0.723	-0.195	-0.094
質問 43. 英語を学ぶことは皆が言うほど重要ではない。	0.712	-0.217	0.004
質問 29. ここは日本なので英語を学ぶ必要はない。	0.667	-0.293	0.105
質問 45. 英語が自分に役立つことはないと思う。	0.634	-0.218	0.178
質問 24. 英語を勉強することは努力に見合わない。	0.626	0.134	-0.113
質問 22. 英語教育のやり方のせいで英語が嫌いになった。	0.619	0.215	-0.213
質問 16. 海外で英語を使いたいけど、英語のクラスで英語を使うことは好きではない。	0.594	0.276	-0.170
質問 14. 将来英語を使うことはないので、勉強する気にならない。	0.541	-0.241	0.146
質問 55. 英語を学ぶことは、トラウマになっている。	0.534	0.096	0.000
質問 39. 英語の習得をあきらめようと思う。	0.520	0.130	0.126
質問 63. 英語を学ばなくてはいけないことがとても嫌だ。	0.506	0.064	0.203
質問 51. 日本の学校では英語の授業が多すぎる。	0.501	-0.001	0.098
質問 18. なぜ英語を勉強しなくてはならないか分からない。	0.494	-0.088	0.227
質問 15. 試験が多いので英語に対して否定的な気持ちがある。	0.483	0.354	-0.008
質問 48. 自分がいつか英語を習得できるとは思わない。	0.444	0.248	0.121
質問 60. 英語が必須科目でなければ勉強を止めるだろう。	0.441	0.134	0.186
質問 64. 外国人と一緒に働きたくないので、英語は必要ではない。	0.441	-0.098	0.340
質問 35. もっと良い先生であれば、英語をもっと好きになっていると思う。	0.439	0.240	-0.361
質問 46. 英語習得に対するモチベーションはもうない。	0.436	0.118	0.292
質問 59. 英語をもっと積極的に使いたいけど自信が持てない。	-0.195	0.857	-0.104
質問 58. もっと英語を使いたいけど、自信がない。	-0.217	0.854	-0.057

質問 67. 英語を話したいけど、自信がない。	-0.287	0.832	0.041
質問 52. 英語を長く勉強してきたが、ほとんど上達していない。	0.148	0.629	-0.152
質問 28. 英語をもっと勉強すべきだと思うが、実際にはしていない。	0.143	0.623	-0.051
質問 66. 英語をもっと話せたらいいけど、恥ずかしい。	-0.089	0.596	0.052
質問 54. 英語を流暢に話したいが、練習することは好きではない。	0.040	0.576	0.235
質問 21. もっと努力しないといけないと分かっているがしていない。	0.124	0.557	0.003
質問 49. 英語がペラペラになりたいけど、練習がめんどくさい。	0.029	0.544	0.203
質問 62. 自分は他の人と比べて英語を学ぶ能力が劣っていると思う。	0.251	0.473	-0.163
質問 25. もっと英語を上手に話したいが、やる気が出ない。	0.213	0.433	0.325
質問 57. 英語を学ぶとワクワクする。	0.032	-0.159	-0.722
質問 53. 英語を使って自分の考えを表現することは楽しい。	0.107	-0.143	-0.702
質問 61. 英語を実際場で使っている人を知っているので英語習得に興味がある。	-0.010	0.080	-0.603
質問 41. 英語を学び、国際人になりたい。	-0.117	0.216	-0.566
質問 20. 英語を勉強することは楽しみだ。	-0.219	-0.095	-0.526
質問 65. 学校での英語の勉強は嫌いだ、実際に英語を使うことは好きだ。	0.147	0.253	-0.477
質問 37. 海外の映画や音楽により英語を学ぶことに興味がわく。	-0.078	0.049	-0.475
質問 36. 英語の勉強は自分にとって良い時間の使い方である。	-0.200	-0.085	-0.445
質問 17. 英語で書かれたものを読むことは面白い。	0.041	-0.400	-0.419

因子抽出法: 主因子法

回転法: Kaiser の正規化を伴うプロマックス法

Miyafusa, Shaules, Schmidt, & Fritz (2020)

因子分析では相関係数が0.39以下数値を削除し、修正された内容で再度データ収集および分析を繰り返し、7回の因子分析を経て最終的なLMPが作成された。検証された項目の中には、よく似た項目もあったため、それらの項目を削除し、最終的には30項目（抵抗：14項目、混合：9項目、前向きな意欲：7項目）となった。項目別の質問事項は表2の通りである。

表2 項目別による質問事項

抵抗
1. 英語は一生懸命勉強してもできないので、努力しない。
2. 日本人が英語の習得を強制されるのは不公平だ。
3. 英語を学ぶことは皆が言うほど重要ではない。
4. ここは日本なので英語を学ぶ必要はない。
5. 英語が自分に役立つことはないと思う。
6. 英語を勉強することは努力に見合わない。
7. 英語教育のやり方のせいで英語が嫌いになった。
8. 海外で英語を使いたい、英語のクラスで英語を使うことは好きではない。
9. 将来英語を使うことはない、勉強する気にならない。
10. 英語を学ぶことは、トラウマになっている。
11. 英語の習得をあきらめようと思う。
12. 英語を学ばなくてはいけないことがとても嫌だ。
13. 日本の学校では英語の授業が多すぎる。
14. なぜ英語を勉強しなくてはならないか分からない。
混合状態
1. もっと英語を使いたいけど、自信がない。
2. 英語を長く勉強してきたが、ほとんど上達していない。
3. 英語をもっと勉強すべきだと思うが、実際にはしていない
4. 英語をもっと話せたらいいけど、恥ずかしい。
5. 英語を流暢に話したいが、練習することは好きではない。
6. もっと努力しないといけないと分かっているがしていない。
7. 英語がペラペラになりたいけど、練習がめんどくさい。
8. 学校での英語の勉強は嫌いだが、実際に英語を使うことは好きだ。
9. もっと英語を上手に話したいが、やる気が出ない。
前向きな意欲
1. 英語を学ぶとワクワクする。
2. 英語を使って自分の考えを表現することは楽しい。
3. 英語を実際場で使っている人を知っているので英語習得に興味がある。
4. 英語を学び、国際人になりたい。
5. 英語を勉強することは楽しみだ。
6. 海外の映画や音楽により英語を学ぶことに興味がわく。
7. 英語の勉強は自分にとって良い時間の使い方である。

Miyafusa, Shaules, Schmidt, & Fritz (2020)

完成した日本語版と英語版のLMPは資料1に掲載してある。両方ともオンライン上で10分弱で入力が可能である。

LMPの教育現場での利用について

LMPは、モチベーションを「抵抗」「混合状態」「前向きな意欲」の3つの観点から測定することができる。モチベーションは動的であり、様々な要因で変化することが想定されているため、この指標は、学習者のモチベーションを絶対的に数値化するものではないだろう。しかし、個々の学習者のモチベーションの混合状態を理解することができる。このセクションでは、LMPを教育現場で活用するための4つの方法について説明する。LMPは、学習者の主観と相互主観の観点から動機づけを探ることができる。つまり、図1のモチベーションと言語文化学習にもある通り、外国語学習の過程には学習意欲が前向きになることもあれば、その途中で抵抗に変化することもある。LMPの結果は、教員が学習者の内的な動機づけの状態を理解することができ、また、授業の振り返りのツールとしても活用できると考えられる。さらに、学習者が自分の内なる動機づけに「気づく」きっかけになるだろう。

LMPは、一種の診断的評価として使用することができる。これは、学習者のニーズを特定しカリキュラムに反映させ、シラバス作成や授業計画に役立つだろう。そのため学習期間の開始時に、学生の言語文化学習に対する態度、信念、認識を明らかにするために使用することができる。特に以下のような場合に有効である：1) 新しい学生を指導するための予備知識や経験がない場合、2) 既存のシラバスを改善するために補習が必要な場合、3) 学生は、LMPを学習期間の開始時に記入することもでき、また入学希望者にメールで送ることも可能である。

LMPの2つ目の使い方は、教員が学習期間中に1回または複数回実施する形成的評価の手段として使用することである。形成的評価は、教員にとって双方向の進捗状況を通じて、学生の多様なニーズに対応することが可能である。そのため、教員は授業内容や学生の学ぶスピードや状況などを確認しながら評価する基準を適宜修正することができる(OECD/CERI, 2008)。LMPを形成的評価に用いるためにLMPを使用することで、教員は学生の学習意欲を高める要因や抵抗感の要因を特定することができる。また、学習者のスキルや長所・短所などのデータを組み込んだ学習者プロフィールの作成にも利用できるだろう。学習者のスキルや、強み、学習に対する姿勢、および学習に対する潜在的な障壁、などのデータを組み込んだ学習者ポートフォリオを作成し、学生が個人の学習目標を定めることも可能である。その結果、教員と学生の間、あるいは学生同士の間に対話が生まれ、クラスのメンバーの学習に対する意識や信念を高めることができる。

LMPの3つ目の方法は、学びの振り返りを促進することである。振り返り(リフレクション)とは自分自身の態度、思考過程、価値観、等を問い直し、他者との関係における自分の役割を理解しようと努力することである(Bolton, 2009)。Scarino, Kohler, and Benedetti (2016)は、異文化間リフレクションには「経験や視点がどのように表現され、表現されたかを振り返る」と指摘している(p.47)。したがって、学習期間中のある時点で、教員は学生が抵抗感を持つ原因となっている事柄を振り返るよう促すことができる。授業終了後も振り返りを継続するために、ジャーナルや文章を書く課題を出し、LMPで得た結果を基にした教材を準備する。また、LMPの結果はデータ収集後すぐに匿名でクラス全員に公開することができるため、グループディスカッションなどのアクティビティを実施するこ

とで、学生が結果に対する自分の考えを共有し、どのような要因があったのかを考えることができる。

最後に、教育実践やカリキュラムやシラバスを改善しようとする教員にとって、LMPはアクションリサーチのデータ収集ツールとして活用できるだろう。アクションリサーチとは、問題を特定し、変化を評価し、その結果を収集するために調査をする。さらに知見を収集し、実践の変化を促すためにさらなる行動を起こす循環プロセスである（Descombe、2014）。アクションリサーチの利点は、学生の学習に対する姿勢や認識や経験に合わせて実践的に改善したいと考える教員に有益である。さらに、LMPは評価ツールではないため、動機づけの「点数」を与えることを意図していない。例えば、全体的に抵抗感が強いと言った一般的なパターンを特定するために、データ収集の第一段階としてLMPを用いることができる。第二段階では、インタビューを通じてこれらの結果に対する考察を得ることができるだろう。この方法でデータ収集することで、それぞれのデータが最終的な解釈を強化、精緻化、補完することができる。

おわりに

教室での実践的な応用に加え、モチベーションを抵抗と前向きな意欲の観点から捉えることには、重要な意味があることが理解できる。やる気をなくすと言う概念は、欠乏や失敗を意味するが、本研究の「抵抗」は、学習プロセスの自然な一部と見なしている。このことは、学習者が抵抗の原因や適切な学びの方法を特定するのに役立つだろう。また学習者の失敗や自責の念を抑えながら、より効果的に学習に取り組むことにもつながる。本研究の主要な取り組みである「混合状態」の概念は、言語学習の心理的複雑さを強調するものであった。この概念は、学習者が心から学びたいと願いながらも、学習プロセスに対する心理的抵抗があることを明らかにするものである。このような考察は、学習者が自分自身の動機づけについてよりよく理解する契機となるであろう。

このアプローチは、言語教室でよく見られる多くの行動に対して新しい見解を提供することにもつながる。課題の出来が悪く、ぎりぎりになって提出する学習者は、罰や恥ずかしさを回避している可能性もあるだろう。この回避的な動機は抵抗の一形態と言える。言語学習のより深いレベルでは、積極的な動機付けである前向きな意欲が必要であると考えられる。学習意欲があると公言しながらも、実際に練習や勉強をしていないように見える学習者は、一種の混合状態を示している。彼らは表面的な学習意欲と同時に、深い抵抗（学習経験に対する直感的または無意識的な嫌悪感）を経験する。そのため自分自身と対立し、自己批判や自己効力感の喪失につながる可能性がある。

動機づけは複雑な現象であり、単一の概念モデルで捉えることはできない。しかし、抵抗と言う観点からモチベーションをとらえ、その反応を測定する手段を持つことで、学習者のモチベーションを理解するためのアプローチを豊かにし、自己理解のための新たなツールを提供することが期待される。そのことが、最終的に積極的な学習体験につながるであろう。

謝辞

本研究は科学研究費補助金（研究課題名：Profiling mixed motivation: An inquiry into learner resist-

ance and engagement in for foreign language learning、研究番号：22K00714）の助成を受けたものである。調査に協力してくれた学生たちに感謝します。またSPSSによる分析方法をご教示くださった東洋学園大学石黒順子准教授にもお礼申し上げます。

研究代表者：Robinson Fritz

研究分担者：Joseph Shaules、Maria Gabriela Schmidt、宮房寿美子

参考文献

- Agawa, T., Abe, E., Ishizuka, M., Ueda, M., Okuda, S., Carreira-Matsuzaki, J., Sano, F., & Shimizu, S. (2011). Preliminary study of demotivating factors in Japanese university English learning. *The Language Teacher*, 35(1), 11-16. <https://doi.org/10.37546/JALTTLT35.1>
- Bennett, J. (1998). Transition shock: Putting culture shock in perspective. In M. Bennett (Ed.), *Basic concepts of intercultural communication* (pp.215-223). Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- Berry, J.W. (1997). Immigration, acculturation, and adaptation. *Applied Psychology: An International Review*, 46(1), 5-68. <https://doi.org/10.1111/j.1464-0597.1997.tb01087.x>
- Bolton, G. (2009). *Reflective practice*. London: Sage.
- Descombe, M. (2014). *The good research guide for small-scale social research projects*. New York: McGraw Hill.
- Hadfield, J. & Dörnyei, Z. (2013). *Motivating learning*. Harlow, UK: Pearson.
- Kikuchi, K. (2013). Demotivators in the Japanese EFL context. In M. T. Apple, D. D. Silva, & T. Fellner (Eds.), *Language learning motivation in Japan* (pp.206-224). Bristol, UK: Multilingual Matters. <https://doi.org/10.21832/9781783090518-014>
- Kikuchi, K. (2015). Reexamining demotivators and motivators: A longitudinal study of Japanese freshmen's dynamic system in an EFL context. *Innovation in Language Learning and Teaching*, 1-18. doi:10.1080/17501229.2015.1076427
- Lafaye, B. E., & Tsuda, S. (2002). Attitudes towards English language learning in higher education in Japan, and the place of English in Japanese society. *Intercultural Communication Studies*, 11(3), 145-161.
- Larsen-Freeman, D. (2011). A complexity theory approach to second language development/acquisition. In D. Atkinson (Ed.), *Alternative approaches to second language acquisition* (pp.48-72). New York, NY: Routledge.
- Miyafusa S., Shaules, J., Schmidt, G., & Fritz, R. (2020). *Linguaculture Resistance and Learner Motivation*, Toyo Gakuen Kiyo.
- Morita, L. (2013). Japanese university students' attitudes towards globalisation, intercultural contexts and English. *World Journal of English Language*, 3(4), 31-41.
- OECD/CERI. (2008). *Assessment for learning: Formative assessment* [Conference session?]. International Conference on Learning in the 21st Century: Research, Innovation and Policy, Paris France. Retrieved from <http://www.oecd.org/dataoecd/19/31/40600533.pdf>
- Scarino, A., Kohler, M., & Benedetti, A. (2016). *Investigating pedagogies for language and culture learning*. Retrieved from <https://www.education.sa.gov.au/doc/investigatingpedagogieslanguage-and-culture-learning-project-comissioned-department-education>
- Shaules, J. (2007). *Deep culture: The hidden challenges of global living*. Clevedon, UK: Multilingual Matters. <https://doi.org/10.21832/9781847690180>
- Shaules, J. (2017). Linguaculture resistance: An intercultural adjustment perspective on negative learner attitudes in Japan. *Juntendo Journal of Global Studies*, 2, 66-78.

- Shaules, J. (2019). Language, culture and the embodied mind: A developmental model of linguaculture learning. New York: Springer. <https://doi.org/10.1007/978-981-15-0587-4>
- Shaules, J., Fritz, R., & Miyafusa, S. (2020). Measuring resistance and engagement: The Linguaculture Motivation Profiler. In P. Clements, A. Krause, & R. Gentry (Eds.), *Teacher efficacy, learner agency*. Tokyo: JALT. <https://doi.org/10.37546/JALTPCP2019-12>
- Sugino, T. (2010). Teacher demotivational factors in the Japanese language teaching context. *Procedia Social and Behavioral Sciences*, 3, 216-226.
- Trang, T. T. T., Baldauf, R. B., & Moni, K. (2013). Foreign language anxiety: Understanding its status and insiders' awareness and attitudes. *TESOL Quarterly*, 47(2), 216-243. <https://doi.org/10.1002/tesq.85>

資料 1

Linguaculture Motivation Profiler (LMP)：日本語版

- 質問 1. 性別をお答え下さい。
- 質問 2. 年齢をお答え下さい。
- 質問 3. 国籍をお答え下さい。
- 質問 4. 母国語をお答え下さい。
- 質問 5. 過去 1 年間の間に英語能力テストを受けましたか？
- 質問 6. あなたの英語力をお答え下さい。
- 質問 7. 他にできる外国語はありますか？
- 質問 8. 過去にどこで英語を勉強しましたか？
- 質問 9. 過去にどこで英語を勉強しましたか？
- 質問 10. 現在どこで英語を勉強していますか？
- 質問 11. 大学生の方へ：主な専攻は何ですか。
- 質問 12. 何年英語を勉強していますか？
- 質問 13. あなたが自国以外の国に滞在した期間は合計でどれくらいですか？
- 質問 14. 将来英語を使うことはないので、勉強する気にならない。
- 質問 15. 海外で英語を使いたい、英語のクラスで英語を使うことは好きではない。
- 質問 16. なぜ英語を勉強しなくてはならないか分からない。
- 質問 17. 英語は一生懸命勉強してもできないので、努力しない。
- 質問 18. 英語を勉強することは楽しみだ。
- 質問 19. もっと努力しないといけないと分かっているがしていない。
- 質問 20. 英語教育のやり方のせいで英語が嫌いになった。
- 質問 21. 英語を勉強することは努力に見合わない。
- 質問 22. もっと英語を上手に話したいが、やる気が出ない。
- 質問 23. 英語をもっと勉強すべきだと思うが、実際にはしていない。
- 質問 24. ここは日本なので英語を学ぶ必要はない。
- 質問 25. 日本人が英語の習得を強制されるのは不公平だ。
- 質問 26. 英語の勉強は自分にとって良い時間の使い方である。
- 質問 27. 海外の映画や音楽により英語を学ぶことに興味がわく。
- 質問 28. 英語の習得をあきらめようと思う。
- 質問 29. 英語を学び、国際人になりたい。
- 質問 30. 英語を学ぶことは皆が言うほど重要ではない。
- 質問 31. 英語が自分に役立つことはないと思う。
- 質問 32. 自分がいつか英語を習得できるとは思わない。
- 質問 33. 英語がペラペラになりたいけど、練習がめんどくさい。
- 質問 34. 日本の学校では英語の授業が多すぎる。
- 質問 35. 英語を長く勉強してきたが、ほとんど上達していない。
- 質問 36. 英語を使って自分の考えを表現することは楽しい。
- 質問 37. 英語を流暢に話したいが、練習することは好きではない。

質問 38. 英語を学ぶことは、トラウマになっている。

質問 39. 英語を学ぶとワクワクする。

質問 40. もっと英語を使いたいけど、自信がない。

質問 41. 英語が必須科目でなければ勉強を止めるだろう。

質問 42. 英語を実際場で使っている人を知っているので英語習得に興味がある。

質問 43. 英語を学ばなくてはいけないことがとても嫌だ。

質問 44. 学校での英語の勉強は嫌いだが、実際に英語を使うことは好きだ。

質問 45. 英語をもっと話せたらいいけど、恥ずかしい。

Linguaculture Motivation Profiler (LMP) : 英語版

*Please note background information has been omitted.

14. I will not use English in the future, so I am not motivated to learn it.

15. I want to use English abroad, but I do not like to use English in my English class.

16. I am not sure why I have to study English.

17. I try to study English hard, but I can't understand well, so I don't make an effort.

18. I study English for my personal enjoyment.

19. I do not try as hard as I know I should.

20. The English education system has made me dislike English.

21. Learning English is not worth the effort.

22. I would like to speak English better, but I cannot get motivated.

23. I think I should study English more, but actually I do not.

24. This is Japan, so I should not have to learn English.

25. It is not fair that Japanese are forced to learn English.

26. Learning English is a good investment of my time.

27. Foreign movies or music makes me interested in learning English.

28. I often feel like giving up on learning English.

29. I want to learn English, so I can become an international person.

30. I feel learning English is less important than people say.

31. I do not think English will ever be useful to me.

32. I do not think I can ever be successful learning English.

33. I want to speak English fluently, but practicing is too much trouble.

34. There is too much English study in Japanese schools.

35. I have studied English for a long time, but have made little progress.

36. It is fun to express my ideas using English.

37. I want to speak English fluently but I do not like practicing English.

38. Studying English has traumatized me.

39. Learning English excites me.

40. I would like to use English more, but I do not have the confidence to do so.

41. If I was not required to study English I would stop.

42. I am interested in learning English because I know people who use English.

43. I really dislike having to study English.

44. I hate studying English in school, but I like using English in real life.

45. I want to speak more English, but I feel shy.
